

できないのです。

私たちに船員が必要のように、船員たちも MTS を必要とします。彼らは家庭から離れて陸と隔離された海で生活の大部分を送っています。彼らはどの職業よりも危険で厳しい環境の中で働いているのが現実です。今日の船は毎日優秀な性能で開発されていますが、船の性能が良くなればなるほど船員たちの数は減り、また優れた性能による船の速さは港での停泊時間を短くしています。そして大多数の船は多様な国籍の船員たちで構成されています。これは直ちにコミュニケーションの難しさによる疎外感、寂しさを作り出します。また長い契約期間による船の中での生活は船員たちをいつでも異邦人としての生活を送るようにしています。自分たちの国ですらです。そして劣悪な環境条件、つまり賃金の遅払い、船上での暴力、不適切な食事、国際規定に則っていない契約条件などは多くの船員たちに生きる意味を失わせています。このような厳しい環境は船員たちに物質的、精神的そして霊的な助けを必要とさせます。MTS はこのような船員たちの厳しくて疲れている生活をより霊的でキリスト者らしい生活に導くように神から召命を受けたと信じています。



司祭 サイモン 盧チョルレ

現在 MTS は日本の横浜、神戸、苫小牧の三か所を含めて全世界 200 か所の港で宗教と国籍に関係なく世界のすべての船員たちに物質的(無料シャトルバスおよび Wi-Fi の提供など)、精神的(船、病院の訪問および人権保護活動など)そして霊的奉仕(聖餐式および信仰相談)などの奉仕を提供しながらキリストの福音を実践しています。横浜 MTS のより具体的な活動はホームページ(www.mtsyokohama.org)を参考していただければと思います。

最後に私たちの望みを簡潔に伝えて MTS の話を終わりにしたいと思います。私たちが望むことは MTS の活動が全ての教会の問題であって、MTS を中心とするいくつかの機関と個人のものではないということを各々の教会が認識することです。MTS の活動の真の価値について横浜教区内の多くの教会が深く認識し、祈る時、神様は私たちの前に置いてある容易ではない MTS 活動の道を歩き続けるようにしてくださいと信じています。ありがとうございます。(司祭 サイモン 盧チョルレ)

社会委員ニュースレター「ちいさな手」第20号 2018年11月9日発行

編集責任者: 宣教主事 司祭 松田 浩 編集・構成: 原 栄理

社会委員: 司祭 竹内 一也、司祭 姜 炯俊、近藤 順子(横浜聖アンデレ教会)、原 栄理(横浜山手聖公会)

横浜教区社会委員ニュースレター

第20号

ちいさな手

子どもたちが置かれている状況・背景

～わたしたちにできること～

児童養護施設「子どもの園」^{その}園長 ^{わだなおき}和田直熙氏 講演会

子どもの園 園長 和田直熙氏

7月14日(土)、当教区と深く関わりのある児童養護施設「子どもの園」の園長、和田直熙氏の講演会が、横浜聖アンデレ教会で開かれました。昨今社会問題となっている児童虐待死問題を皮切りに、「子どもたちが置かれている状況・背景」について和田氏の働きの中からお話を聞き、わたしたちの支援のあり方について学びの時を持ちました。

虐待を取り囲む状況

「おのが児を忘れる母があろうか。おのが腹を痛めた児に憐れみをもたぬ母があろうか」(イザ 49:15)

現在、日本では心中を除く虐待死の9割以上(92.3%)を、身体的虐待とネグレクト(養育の放棄・怠慢)が占めています。また別の調査では、その中で実の親からの虐待が3/4以上(77%)を占めており、虐待の主体となっています。しかし、これらは虐待の原因として挙げられている社会階層、貧困、ひとり親、家庭内暴力、親の薬物・アルコール依存、児童の疾病、障がいや精神疾患といった個々の原因によるのではなく、これらの複合要因に注目するべきで、その解決には親や家族のみ虐待の罪を負わずのではなく、社会的な支援の必要性もまた和田氏は強調されます。

児童養護施設の担う特別支援教育と養護

日本における児童養護施設の役割として、虐待の原因の一つとされている障がい・精神疾患を抱える児童の受け入れが挙げられます。障がい児に対する研究や理解が進むにつれ、障がいの認定を受ける児童が増加し、中でも社会的養護を必要と

する児童においてもその増加傾向は現れています。しかし、様々な困難を抱えた子どもたちに恒常的な生活様式を持つ安定した生活の場が保たれることによって、子どもたちは施設から巣立ったあとも、多くの交わりのあった人々とともに自らを自らで養っていくようになるのだ、と和田氏はおっしゃっていました。

わたしたちにできること

これらのことを踏まえ、支援者となるわたしたちにできることとして下記の5点を示されました。

- ① 養護施設の取り組みについて、さらなる理解の深化
- ② 養護施設にコーディネートする人の拡充
- ③ 入所児童のホームステイの受託
- ④ 「住み込み」で勤務する人のあっせん
- ⑤ 養護をもっと楽しく取り組むアイデアの提供

今回の講演会には、子どもの問題に関心ある方のみならず、幅広い世代と問題意識を抱えていらっしゃる23名の方々が参加されました。最後に活発な質疑応答を交えて散会となりました。子どもの園の働きをお覚えください。

(社会委員：ニコラス ^{はらえいり} 原栄理)

面会支援ボランティア報告

今年度は、6月28日に東京入国管理局(品川入管)へ、また10月10日には東日本入国管理センター(牛久収容所)へ、難民・移住労働者問題キリスト教連絡会(難^{なん}キ連^{れん})の事業ボランティアとして面会支援を実施しました。それぞれ21名、12名の参加者があり、継続して収容者の支援を行っています。今回は、品川入管に参加された難キ連のボランティアスタッフである高井敬子^{たかいけいこ}さんからご寄稿いただきました。

難キ連ボランティアで出会った人、知ったこと

6月28日、東京入管品川収容所被収容者面会支援にご一緒させていただきました。この日は面会を予定していた4人の被収容者がもう品川入管にはいませんでした。送還されてしまったのか、保証人が見つかって出られたのか牛久など他の収容施設に移送されたのかは確かめることができません。

『夜と霧(ヴィクトール・フランクル著)』の翻訳をされた池田香代子^{いけだかよこ}さんは、絶望の場所だという点で「牛久収容所はアウシュビッツのようだ」と言われました

が、日本における外国人収容所とは、世界の先進国で最も闇の中に隠されている場所だと感じられます。被収容者面会支援以前は、自分の国のほうがひどいから収容されるくらい耐えられるのでは？ と思っていました。でも、難キ連日本語講座で出会った収容経験者のその後を知って、それは間違いだとわかりました。収容が心身に消すことのできない大きな深い傷を与えていることを知らされました。

日本では難民条約に加入していながら独立した難民審査機関がありませんので、難民申請をしてから何年も待たされ不認定となって仮放免になれば、居住地が東京であれば、東京以外には入管の許可なく横浜にも行けないのです。また、定期的な入管出頭日に突然収容され、仮放免になっても品川や牛久に何度も収容される…… 収容されている人々についての一切の情報や状況は知られることはなく彼らからの発信がなければ面会は出来ないのです。こうした隠された収容者の方への面会は、どんなにか彼らの気持ちの支えになるかと思います。法務省が外国人の人権を世界基準で守るように変わるまで、これからも私たちもともにこの方たちを見守り、無事をお祈りくださいますよう、心よりお願いいたします。(難キ連：高井敬子)

寄付のお願い 収容者への差し入れに、以下の寄付を募っています。

- 金券(商品券、ギフト券、図書券、図書カード、株主優待券など)
 - 未使用テレホンカード
 - はがき・便箋・封筒類
 - 文房具類
 - 石鹸
 - シャンプー・リンス
 - 歯ブラシ・歯磨き粉
- <送り先>

〒169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18-24
NCC 気付
『難民・移住労働者問題キリスト教連絡会宛』

The Mission To Seafarers チャプレン^{あいさつ}挨拶

MTS の話一海、船、船員そして教会

はじめまして。去る6月から横浜港に入る世界各国の船員たちと共に生きている横浜ザ・ミッション・トゥ・シーフェラーズ(MTS)のチャプレンを務めている盧^ろチョルレです。今年で誕生から162年、そして横浜港で活動を始めて138年になるMTSの話を皆様と分かち合うことができ嬉しく、また感謝しています。MTSの活動に関する二つの基本的な問いを中心にお話しをしたいと思います。

私たちは毎日の生活を神様に頼って生きています。同じように私たちは毎日船員たちに頼って生きています。それは私たちが毎日の生活を送るのに必要な物の大部分が船員たちによって運ばれているからです。現在世界交易の90%以上が船で運ばれています。私たちの産業現場に必要な様々な原材料、そして私たちの家庭の必需品が船で運ばれているのです。海、船、そして船員無しでは今日の私たちの生活は想像すら